

取手市埋蔵文化財センター第9回企画展

稲と鉄の世界

平成15年

2月25日[火]—4月25日[金]

午前10時～午後4時30分(入館は4時まで)

入館無料／休館日 月曜日



開催にあたって

かつて、「米」という文字は分解すると「八十八」になる、お米は農家の人が「八十八」もの苦勞を積み重ねて作ったものだから、一粒たりとも粗末にはしてはいけない、といわれたものでした。しかしこの言葉も、今では死語となってしまったように感じられます。機械化される以前の米作りは、収穫にいたるまでにそれぞれ「八十八」でもきかない苦勞の積み重ねの連続でありました。それは機械化された現在の米作りにおいても、同様といえましょう。

また収穫後の藁は、牛馬の飼料・田畑の肥料・縄・俵・蓑と余すところなく利用されてきました。これはまさに現在声高に唱えられている資源循環型社会・リサイクル社会を、ついこの間までの私たちの父祖が、身をもって実践していたことにほかなりません。

いっぽう土を耕す農具は、見た目大部分は木で作られていましたが、一番肝心な部分は鉄で作られていました。わずか一部分の鉄のかたさこそが、米作りにかぎらず農耕をささえていたのです。

今回の展示では、人びとの生活に密着していた稲の耕作と、収穫後の藁も余すところなく活用してきた先人の苦勞と知恵の一端をご紹介できればと、考えています。

平成15年2月

取手市埋蔵文化財センター

講演会

「想い出の水郷 一心に残る農村の風景」

鴻野伸夫氏 桜川村文化財保護審議会委員

日時 3月15日(土)

午後1時30分から

場所 埋蔵文化財センター2階講座室

定員 40名 当日受付順

体験学習会

「わらぞうりを作ろう」

利根町みどり会手作り部

日時 3月29日(十)・4月20日(日)

どちらも午後1時から

場所 埋蔵文化財センター2階講座室

定員 各回15名(受付順)

小学5年生から中学生まで(保護者同伴可)

3月分は3月15日から、4月分は4月15日から、センター窓口と電話にて、午前10時から午後4時まで受付(月曜休館日は除く)

展示説明

3月2・15・16・30、4月13日、午後2時から(3月15日は午前11時から)

例言

1. このパンフレットは、平成15年2月25日から4月25日まで開催される取手市埋蔵文化財センター第9回企画展「稲と鉄の世界」にともない、発行されたものです。
2. この企画展の企画とパンフレットの執筆・編集は、当センター職員の飯島章が担当し、その他職員の協力を得ました。
3. この企画展の開催にあたり、次の方々からのご協力とご助言をいただきました(敬称略)。記して深謝の意を表します。

飯塚かつ枝、飯野雄一、海老原恒久、大井實、岡野貞美、萩原ちとせ、小幡ちい、角田フジ、北島充、木村廉、鴻野伸夫、斉藤一夫、捧潔、染野修、染野亮子、染野美智子、竹内孝明、遠山仁恵、長塚光男、中村ヤキ子、奈良浩伸、成島志げ、野口幸子、平本重喜、広瀬誠之、宮淵文子、武藤静江、山口貞江、湯原長武

足立区立郷土博物館、我孫子市史編さん室、市之代地区、茨城県自然博物館、茨城県立歴史館、岡堰土地改良区、利根町教育委員会、利根町みどり会手作り部、流山市立博物館、野馬追の里原町市立博物館、藤代町教育委員会、龍ヶ崎市歴史民俗資料館

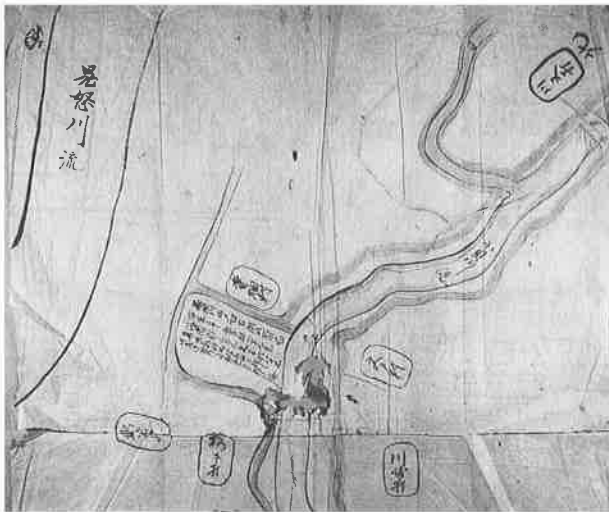
I 開発と米の時代

1. 相馬二万石の成立

現在の取手市から藤代町にまたがる小貝川流域の一帯には、相馬二万石と呼ばれる美田が広がっています。ここでは、江戸時代はじめの河川の改修や用水路・悪水路（排水路）の開削によって開発されました。

すなわち寛永2年（1625）から7年にかけて、現在の谷和原村寺畑で合流していた鬼怒川と小貝川が分離され、小貝川は取手市と利根町の間で利根川に流れ込むように改修されました。さらに寛永7年には岡堰が設けられ、相馬二万石の開発が進められたのです。江戸時代の岡堰用水組合は32か村で構成されていましたが、このうち小文間・吉田・長兵衛新田・青柳・井野・台宿・桑原・寺田の8か村が、取手市域の村です（上高井と下高井の2か村が加わる場合もあります）。

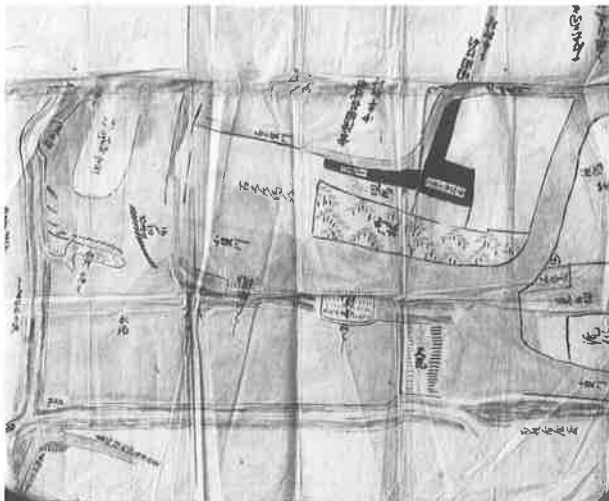
明治32年（1899）には、近代技術の粋をつくしたレンガ堰が完成しました。赤レンガの岡堰の威容は、緑深い周囲の景観と咲き誇る桜の花の色に映え、春は花見の名所としてにぎわいました。昭和に入るとコンクリート堰への改修がはじまり、昭和35年（1960）にすべての工事が終了しました。さらに昭和58年からの大改修工事は、14年の歳月をかけ平成8年（1996）に完成し、岡堰の用水は今も相馬二万石の水田を潤わしています。



享保20年11月 寺畑村の鬼怒川・小貝川分離地点の絵図
(取手市教育委員会所蔵)



嘉永7年1月
下総国相馬郡岡堰組合村々控帳
(小幡ちい家文書)



岡堰の絵図(取手市教育委員会所蔵)



レンガ堰時代の岡堰(写真提供 成島志げ氏)

2. 佐倉惣五郎と取手

義民として名高い佐倉惣五郎は、取手とも深いかわりがあります。

慶安4年(1651)、堀田正信は、三代将軍徳川家光に殉死した父正盛の跡を継ぎ、佐倉藩10万石の藩主となります。この時、市域の小文間・吉田・長兵衛新田・青柳・井野・台宿・桑原・寺田の8か村は、引き続き佐倉藩領となっています。

さて後世書かれた「地蔵堂通夜物語」や歌舞伎の「東山桜荘子」などによる惣五郎の物語は、重税を課す堀田正信に対し印旛郡公津村(千葉県成田市)の名主惣五郎が、いくたびもの苦難の末に、ついに上野寛永寺に参詣した4代将軍家綱に直訴し、年貢の減免を勝ち取ったものの、妻と4人の幼い子供ともども死罪に処せられるというものです。

万治3年(1660)、正信が無断で佐倉に戻り幕政を批判する書を提出したことにより、佐倉藩はおとりつぶしとなっていますが、翌万治4年、幕府の代官は佐倉藩の年貢が高すぎるとして「2分」(2割説と2パーセント説があり)を免除しています。よって惣五郎の物語には、なにかしらの歴史事実が反映されていることには間違いありません。

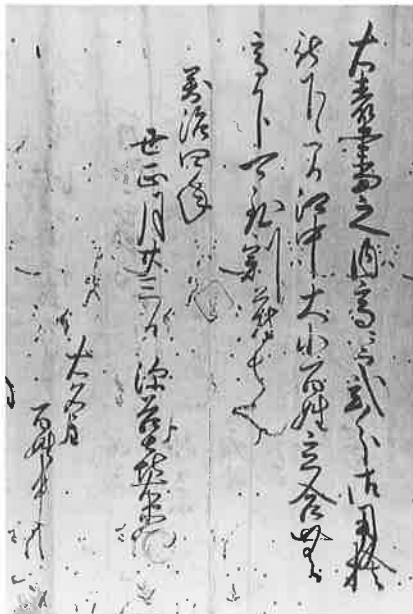
わが身を犠牲にして重税を課す領主に立ち向かい、領民を救った惣五郎の生き方が、今でも多くの人びとの涙と感動を誘っていることは、まぎれもない事実です。



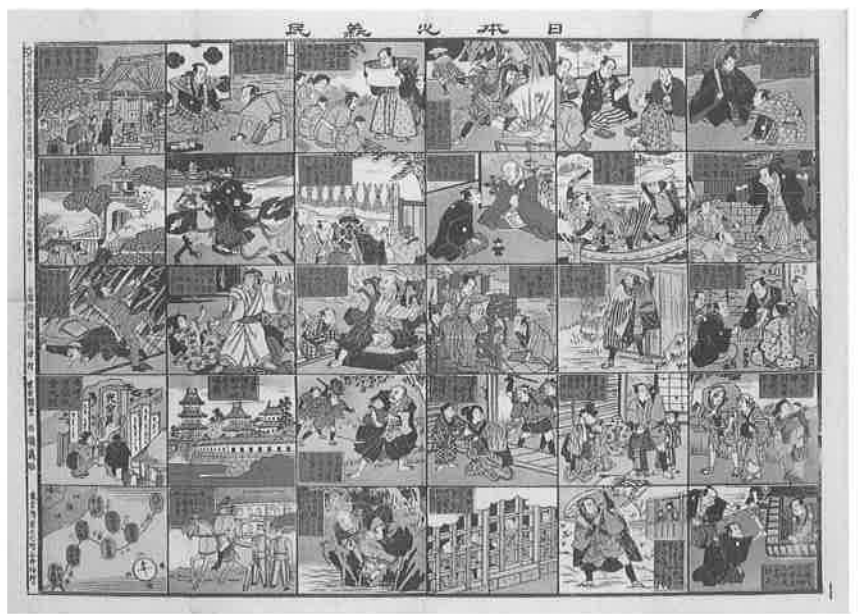
嘉永2年7月26日に写された佐倉惣五郎の訴状(小幡ちい家文書)



「成田名所図会」に描かれた宗吾祠(現在の宗吾霊堂、海老原恒久家文書)



佐倉藩のおとりつぶしの後、年貢を2分減免するとの万治4年1月23日付けの幕府代官深谷喜右衛門の裏書(平本重喜家文書)



大正8年5月 日本の義民(取手市教育委員会所蔵) 佐倉惣五郎の直訴にいたる経緯と、後日談が描かれています。

II 四季農耕図と農具

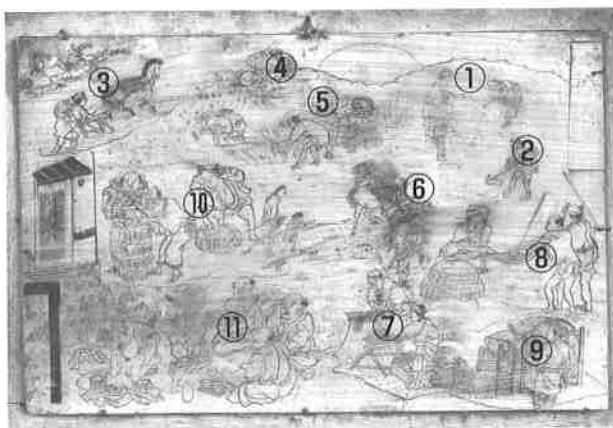
1. 米づくりの一年

四季農耕図とは、稲作の一年の作業を四季の移り変わりの中で描いたものです。さて市内市之代の姫宮神社には、この四季農耕を描いた絵馬が奉納されています（表面の写真は表紙）。小さい画面に大勢の人と多くの作業風景を描きこんだためでしょうか、人・馬・土蔵・水田の大きさが不釣り合いですが、かえってほほえましい感じもうけます。また裏面にも、彩色はされていませんが表面とほぼ同じ図柄の四季農耕の絵が描かれています。こちらには、千歯こきを使って稲穂から穀粒をもぎ取る^{ふすま}ところ、唐箕（トウミ）を使って穀粒を精選してごみや籾殻を取り除いているところ、そして酒宴を催している男たちが書かれています。

千葉県我孫子市中峠の旧家には、四季農耕の襖絵^{ふすま}が伝わっています（写真は裏表紙）。この絵には、稲作のほかに麦の耕作も描かれているのが特徴です。特に田植えの時期は麦の収穫とかさなり、その忙しさは本当に「猫の手も借りたい」程だったと言われています。



明治30年 四季農耕図絵馬の裏面（市之代姫宮神社所蔵、写真提供 茨城県立歴史館）



- ①種まき ②鋤（クワ）をふるっての田起こし
- ③馬鋤（マンガ）を馬に引かせての代かき ④田植え
- ⑤稲刈り ⑥稲の運搬 ⑦脱穀（千歯こきで稲穂から穀粒をもぎとる）
- ⑧籾摺りをして籾から籾殻を取り除き玄米にする ⑨唐箕で玄米と籾殻を選別する
- ⑩米を俵に詰め蔵に納める ⑪酒宴を催す男たち



犁(リ)を牛に引かせての田起こし
(写真撮影 中村国利氏、写真提供 龍ヶ崎市歴史民俗資料館)



しろ
代かき (写真撮影 中村国利氏、写真提供 龍ヶ崎市歴史民俗資料館)



手車を使用しての水汲み (写真提供 龍ヶ崎市歴史民俗資料館)

踏み車を使用しての水汲み (写真提供 龍ヶ崎市歴史民俗資料館)



親子米づくり体験講座での田植えの光景
(平成14年5月11日、市之代農業ふれあい公園)



除草機を使用しての草取り (写真撮影 中村国利氏、写真提供 龍ヶ崎市歴史民俗資料館)

2. 藁の利用

収穫後の藁は、飼料・肥料・縄・俵・蓆と残すところなく使われました。縄ないや俵編み・蓆編みは、農閑期の大切な仕事でした。

また米俵は、富を象徴するものとしても扱われてきました。おめでたい神、福德をもたらす神といえ、大黒様だいこくさまの名前で親しまれている大国主命おおくにのみことですが、大黒様は米俵の上に座ったお姿で描かれていることから、そのことがうかがえます。



初荷の光景(写真提供 宮淵文子氏) 馬が引く荷車には米俵が積まれています。



足踏み式縄ない機を使つての縄ない作業(写真提供 流山市立博物館)



俵編み機を使つての俵編み作業(写真提供 龍ヶ崎市歴史民俗資料館)



藁ぼち 藁はいろいろな用途があつたので、このように積んで保存しました。



昭和13年1月1日 福徳すごろく円満壽吳録(取手市教育委員会所蔵)
右下の振り出しには米俵に乗った大黒様(大国主命)が描かれ、米俵が富の象徴として扱われていたことがうかがえます。



④

③

②

①

四季農耕図襖(大井寛家所蔵、写真提供 我孫子市史編さん室)

①下の方は絵が剥げ落ちてしまっています。中ほどには、苗代作り・種まき・馬糞を馬に引かせての代かきの場面が描かれています。②下半分は田植え、上半分は麦の収穫です。まさに農繁期そのもので、休むいとまありません。③いよいよ収穫です。今年も大豊作だったのでしょうか。稲を刈る女の人たちの動き、それを運ぶ男の人たちの足取りも弾むようです。中ほどでは、千歯こきを使った脱穀が行われています。上のほうに目を転じると、畑では麦をまく作業がはじまっています。④下では、藁の上で脱粒しない穂屑をくるり棒で打っています。その上では、粉を藁に広げて乾燥させています。場面は上に移り、粉摺りです。次は左下にきて、唐箕で玄米と籾殻を分別します。右にきて、万石とおしで米と籾殻を選別します。こうしてできた米を俵に詰め、蔵に収納します。



貞享5年5月9日 岡堰裁許絵図(取手市教育委員会所蔵)

取手市埋蔵文化財センター第9回企画展

稲と鉄の世界

平成15年2月25日～4月25日

編集/発行 取手市埋蔵文化財センター

制作/印刷 有限会社石山宣伝研究所